

床下アパートメント

地は私たちの動きに敏感である。歩けば足跡が生まれるし、水をまけば芽が出て、掘り返せば穴が生まれる。その横には丘もできあがるだろう。人間と親密に対話できる「地」であるが、今では冷たいアスファルトに覆われてしまい、私たちは「地」に触れることがなくなった。

だから今、床を剥がしコンクリートも剥がしてみよう。家の床下には地があったはずだ。この家は、床下が肥大した「地のある家」である。「地」は繰り返される日常によって地形をつくり、代わりに、私たちは「地まみれ」になっていく。

ふと気がつくと、私の知らない地形が刻み込まれている。「地」に触れているのは私だけではないのだ。地に触れた私たちは、「誰かが地に触れた痕跡」によって「その誰か」に触れることになる。





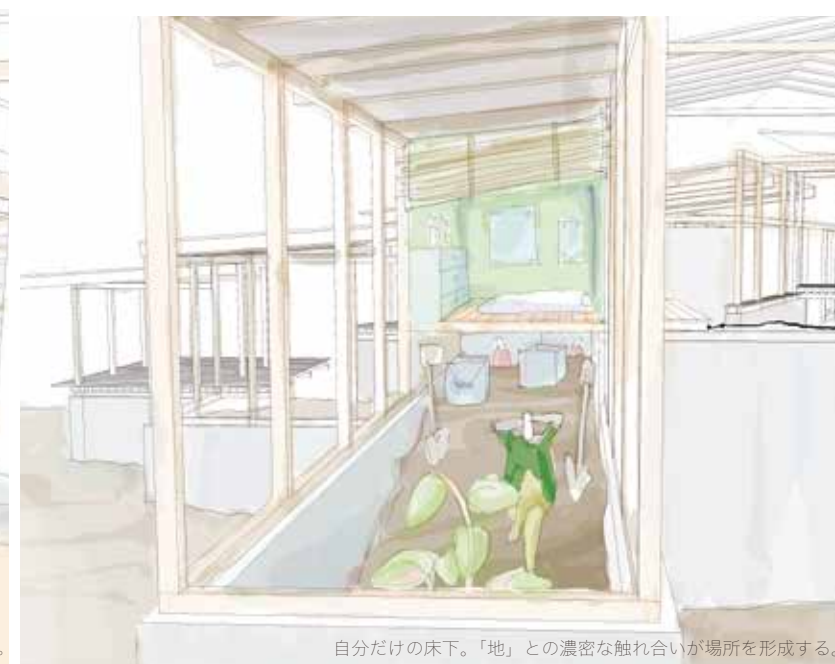
屋外から屋内へ、地面は繋がっている。



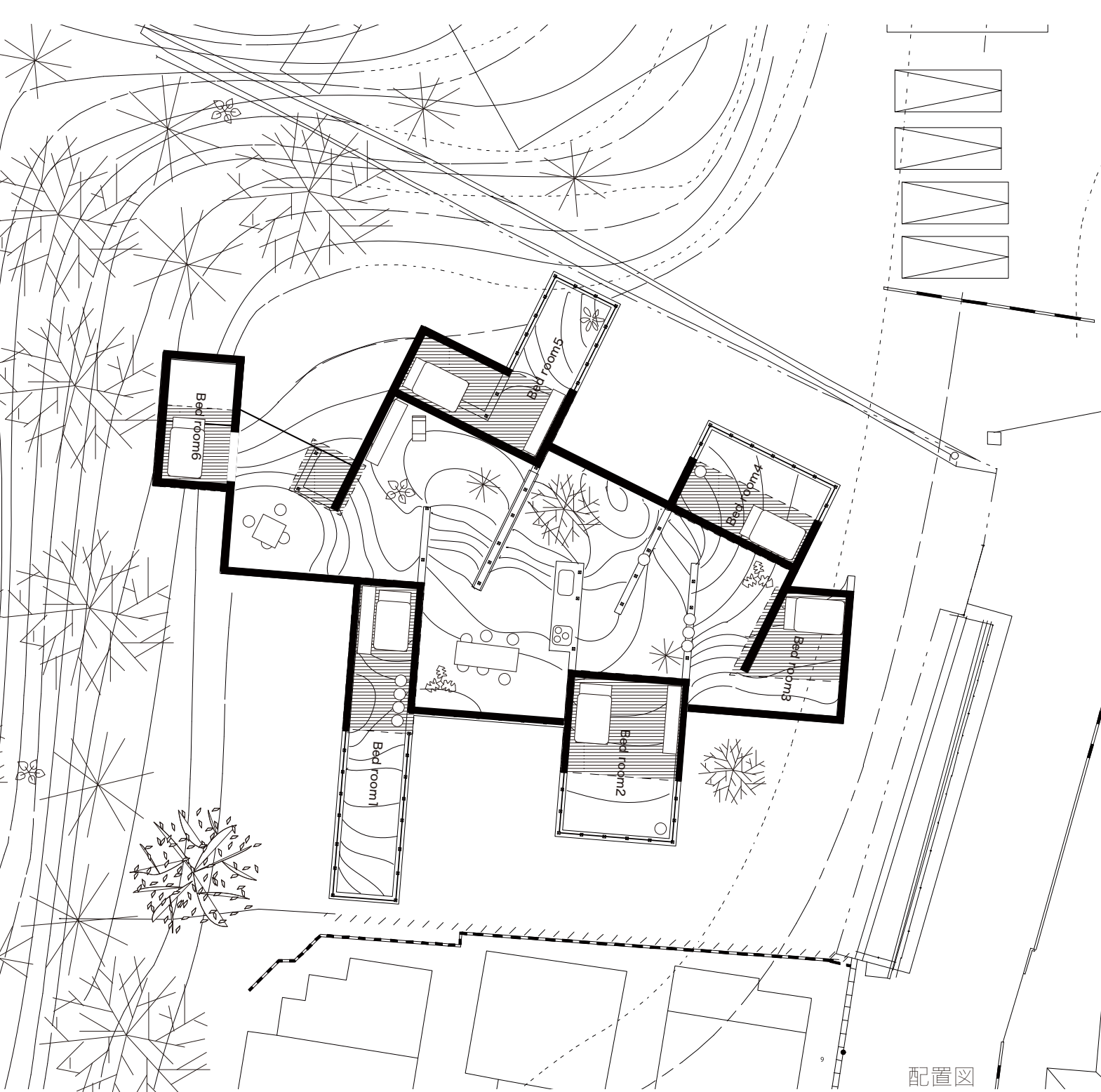
みんなの床下。誰かが「地」と触れ合った痕跡が無数に重なる。



地が高さを作り、視線よりも高い「地」と触れ合う。



自分だけの床下。「地」との濃密な触れ合いが場所を形成する。



配置図

## 地形のある集合住宅

この集合住宅は単身6世帯が住むアパートメントである。ここでは、床はわずかしか存在せず、誰もが、地面を踏んで生活をし、生活の痕跡を残しながら暮らしている。

### 「日常の地形」

家は、生きられるなかで人との触れあいがある。この触れ合いは、本棚の日焼け、椅子の足のゴム、畳のすり減り、テレビの位置など、様々な物質の形・配置として、また私たち自身の形・振る舞いとして姿を表す。このような日常生活の触れ合いが現れている空間を「日常の地形」と表現したい。もし、私の生活から生まれた「日常の地形」が、あなたに触れたのなら、あなたは私について感じることができる。ここでは、あなたと私も、触れ合っているのではないか。



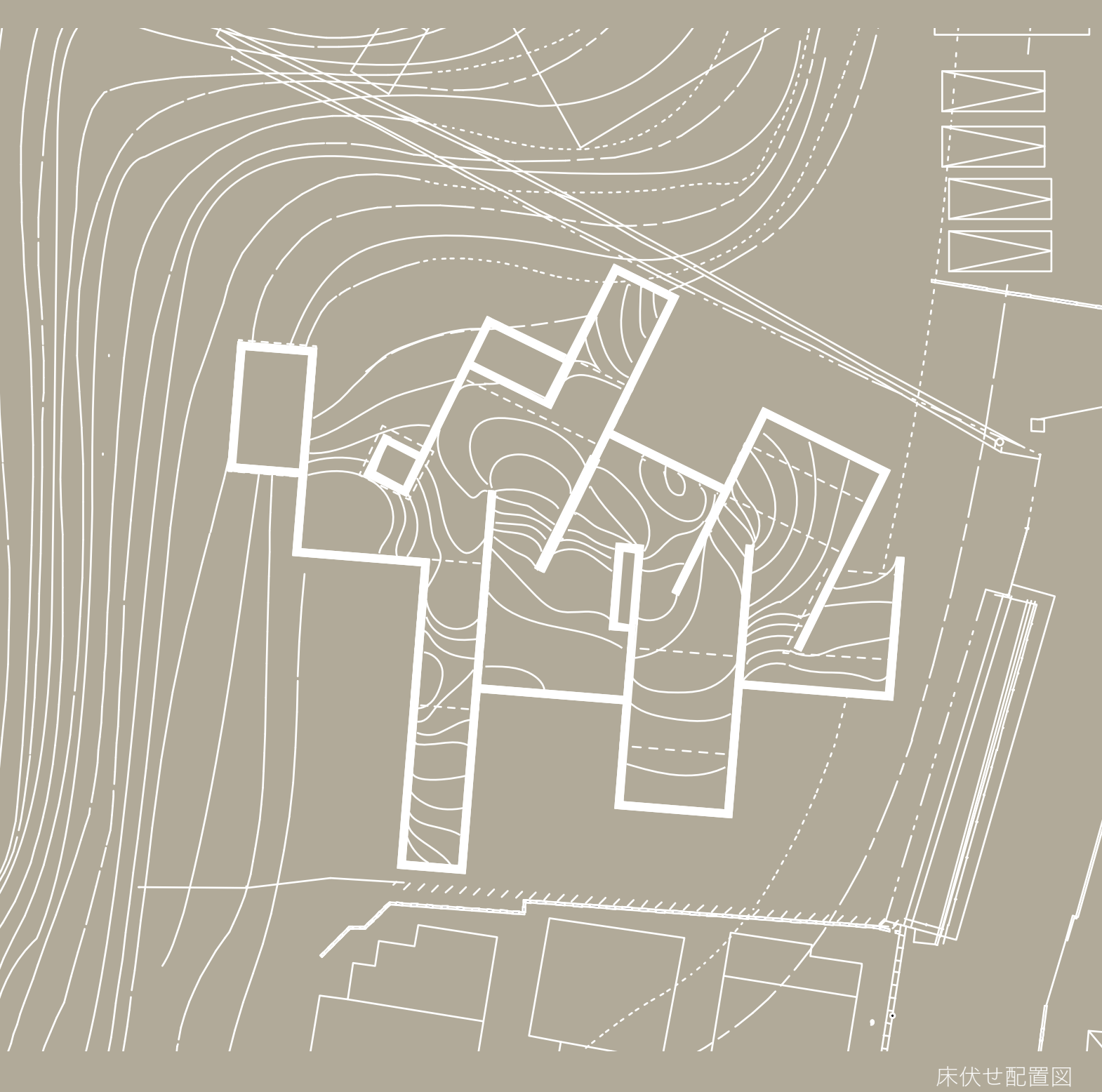
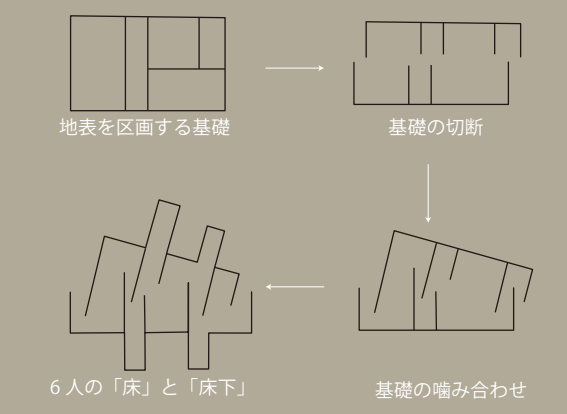
「日常の地形」は現代住宅のような固いところには現れにくい。だが、私たちの床下にいつもいる「地」は、竪穴式住居の頃から「日常の地形」を作り出していたはずだ。穴をほって身を守り、土を盛り段差を作り、他の生物を感じながら生きてきた。床下を開放したこの集合住宅は、文字通り「日常の地形」を刻みこみ、「地」離れた誰かに触れ・触られる家となる「日常の地形」として現れる「触れあった痕跡」が暮らす人同士に新たな触れ合いをもたらすのだ。

### 「鎌倉の地形」

この敷地は鎌倉にある谷戸である。銭洗弁財天などが存在する周囲の山は、頂上に神社が構え、谷から山へ上がることで神聖な領域に入ることができる場所である。厳しい角をもった斜面は複雑な地形を形成し、ここでの生活に多大な影響を与えてきた。



この複雑な地形をならすのではなく、基礎を切断し、地表を連続させることで、そのまま引き込むことで、鎌倉の自然や歴史に接続する住宅となる。地表面を文字通り地続きとする。各居室は床下の地面で繋がり、また外部の地表面とも繋がっていく。



床伏せ配置図

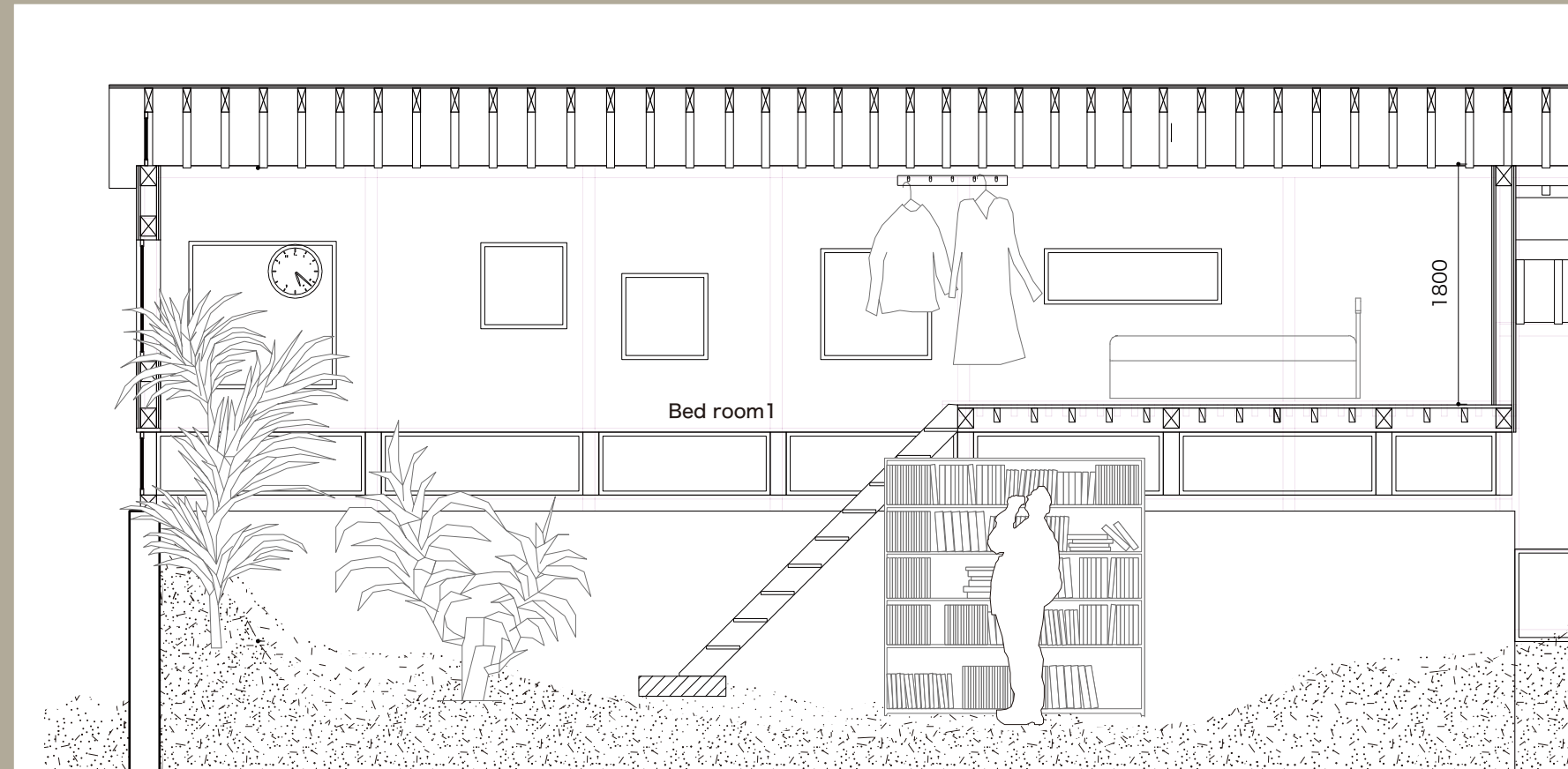
## 床下の神秘

いうまでもなく建築は、シェルターとして人間を守るための外界との隔絶という役割と、世界の広がりの中に人を位置付けるという矛盾した側面を両立することが求められる。縄文時代から変わらないこの葛藤は、少しずつまい折り返いをつけ、素晴らしい屋根、壁、床によって私達を心地よく守ってくれるし、エアコン、床暖、加湿器、空気清浄機、など多様な機械が空間を整えている。しかし、ここに得られた快適性は身体から始まる因果関係から非常に遠くなった。かつて寒さに

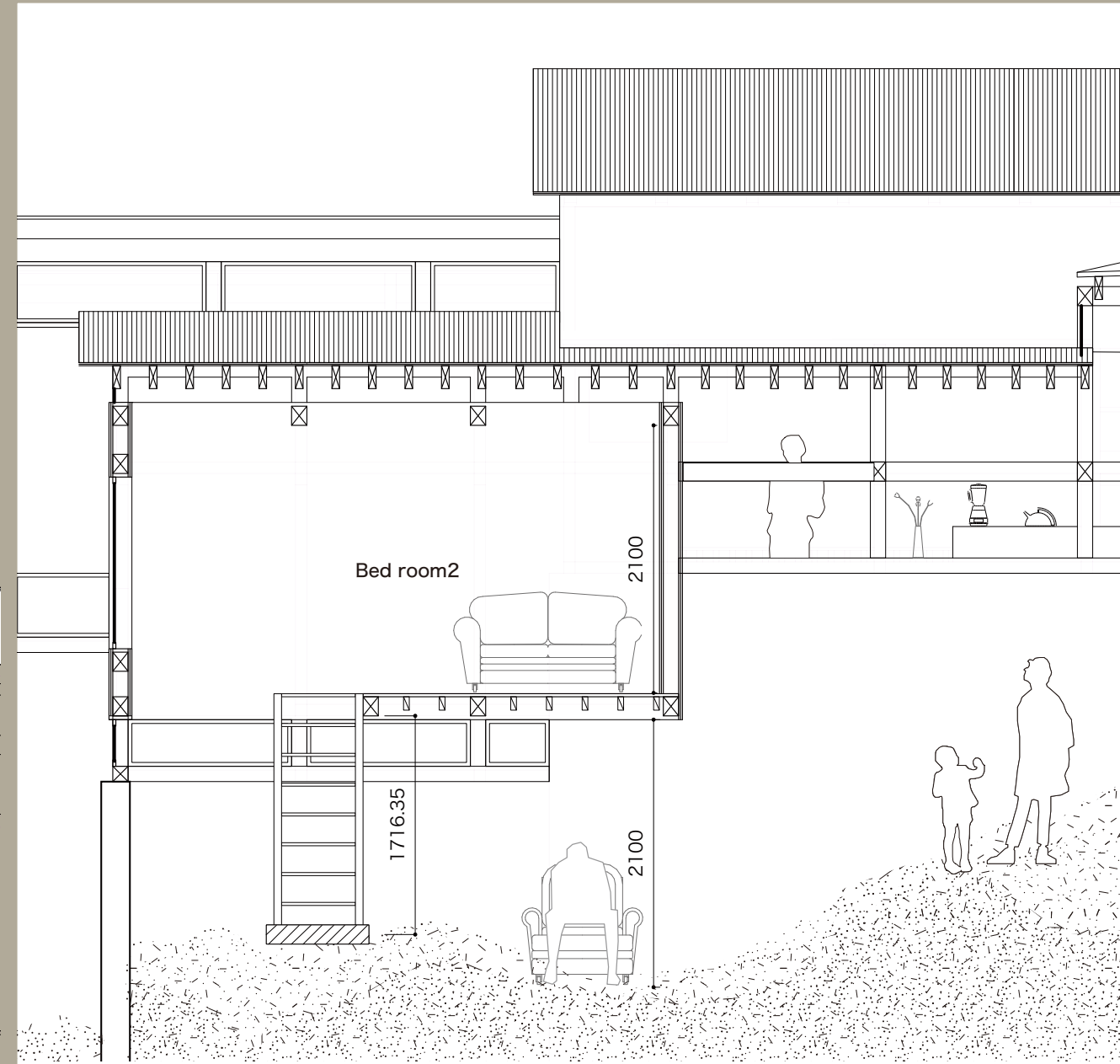
震える体を温めるためには、手で木をつかみ、腕をうまく振りながらすり合わせることで、小さな火の粉を作り、可燃性の高いものから順々に火を移しながら風を当てて、得られるものであった。今日では、親指で「暖房」のボタンを押すことで得られるものである。とても素晴らしいと思う。私は、この現代の快適性を肯定したい。この素晴らしい先人たちの功績を讃えたいし、その暮らしをしたい。そしてその上で、この快適性や先人たちの成果を一度捨ててみたいのだ。

確かに、無意味な行動で、流行という一時的な価値観に落とし込む行為かもしれないが、しかし、そうすることで初めて私たちは「床下の秘密」に出会うことができるのではないか。「暖房」というボタンと体の温もりというものの間にある、魔法のような因果関係には、現象学的な神秘が宿っていて、これを暴くことに一つの快感があるように思う。ガストン・バシュールは、家の中に宇宙があると書いた。素晴らしい技術によってできた現代の家には、あらゆるところに宇宙が生まれてい

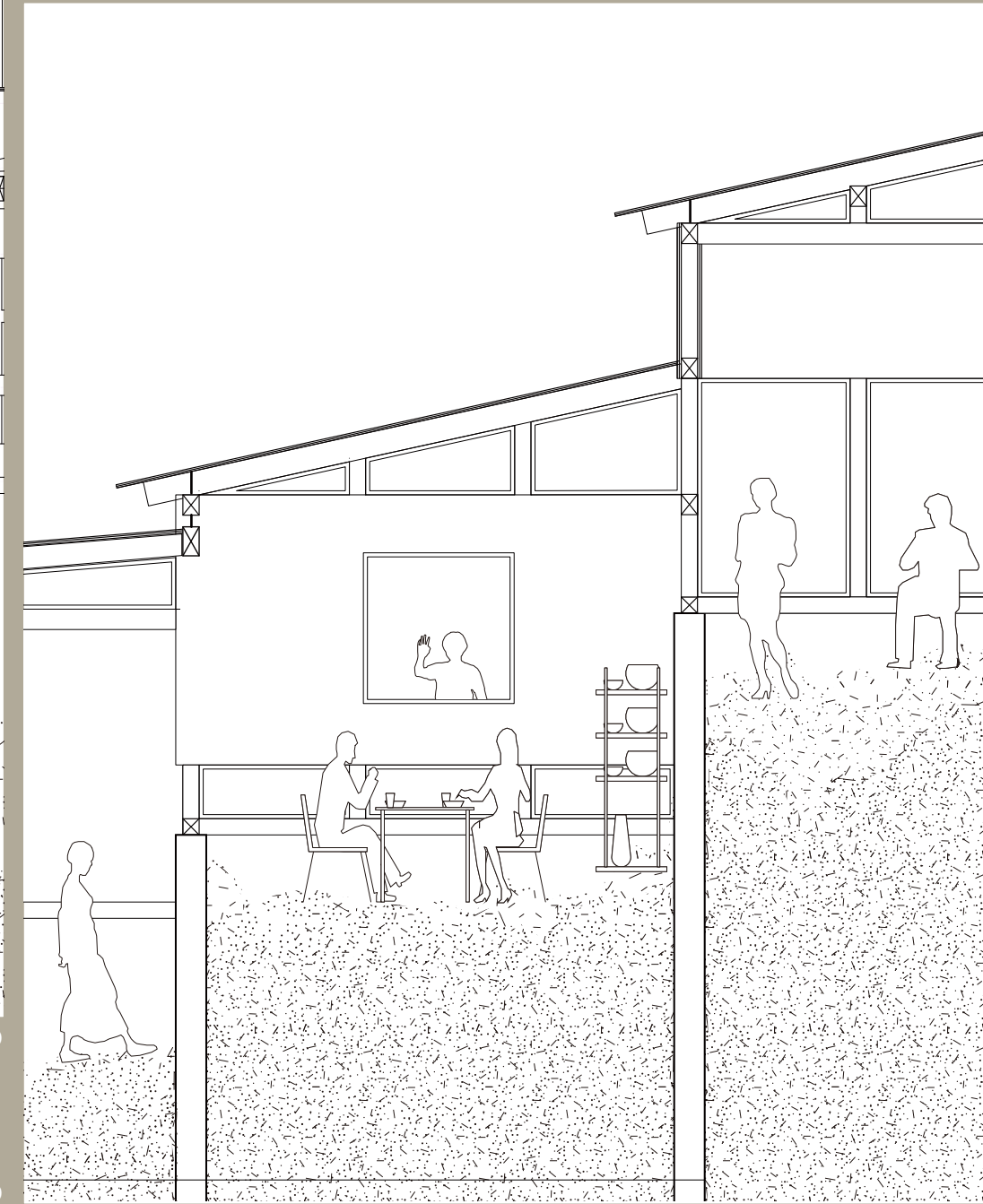
るのだろう。このアパートメントは、床下の神秘を暴く。普通あるものが存在せず、普通立つことのできる場所に立ってない、逆に普段感じることのできない床下に降り立つ。利便性を全肯定し、その上で捨て去ることへの喜びを素直に見つめ、これらの喜びに満ちた暮らしを作ろうと試みた。



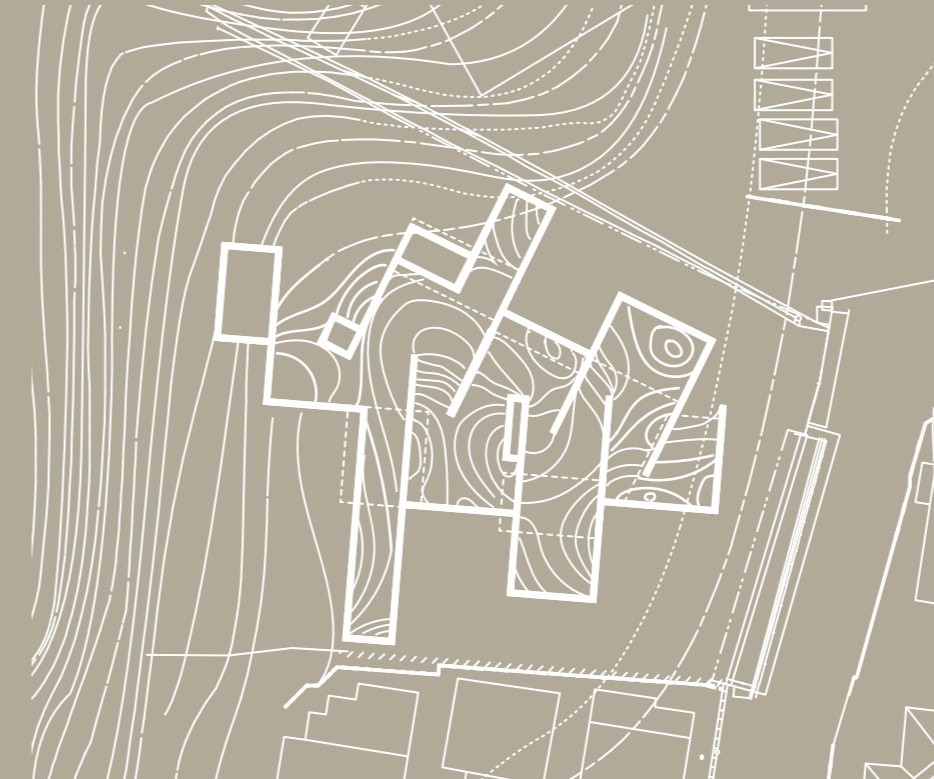
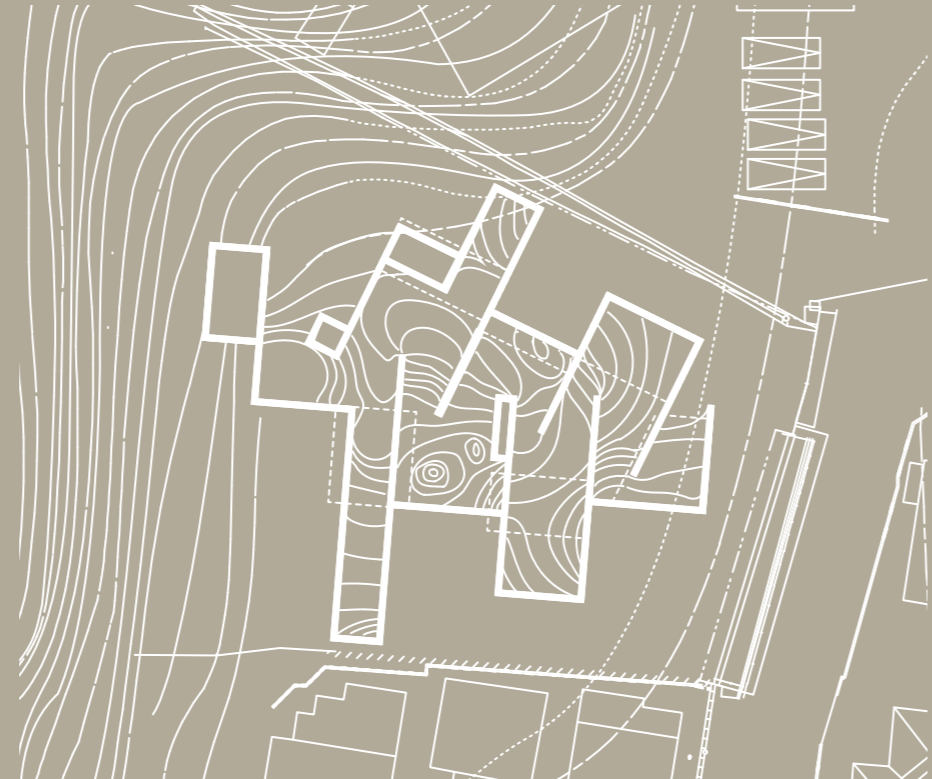
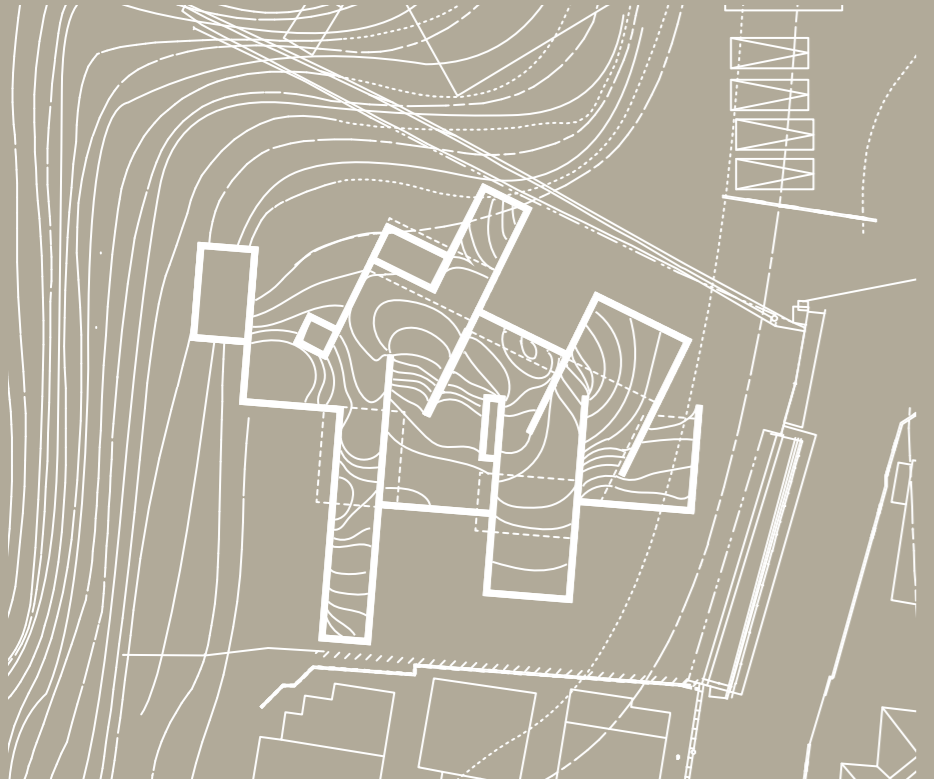
S=1:50



S=1:50



S=1:50





基礎と床のあいだにある土台を、高く持ち上げる。300mm 上がるところがあったり、600mm 上がるところがあったり、0mm のところもある。このような土台の持ち上げによって、床下には光が差し込み、風が通り抜け、陰湿な空間にむらが生まれる。暮らしに耐えうる場所になりつつも、依然として暗がりのある場所でもあり、それらが地続きになった生活空間が、日常を複雑なものにする。分節され重なりあった屋根は、鎌倉の谷戸にあったような小さなものの集まりとして姿を与える。一つの屋根には一つの寝室があり、内部空間のありようをそのままの姿とする。



床がなくなることで、地面は低く掘られるだけでなく、高くなっていく。アパート内部に立体的な地形が生まれ、生活のちょっとした動作で等高線が変化する。自分の生活習慣が家に変化を与え、暮らしの中で自分の形にあった家へと変化する。  
またその変化には暮らしの気配が残り、それに触れたあなたは、柔らかく他者の存在を受け止める。

